美祢市立於福中学校

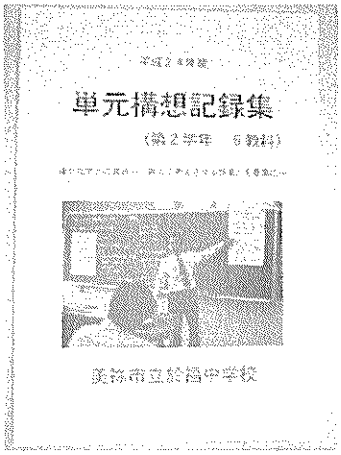
実践事例

1　実践の概略

本校では、今年度までの４年間にわたって美祢市の研究指定を受け、「教えて考えさせる授業」を基調とした授業改善・学力向上に取り組んできた。昨年度までの３カ年で、全教職員が「教えて考えさせる授業」についての研修を深め、授業を中心とした取組の成果が各学年の生徒の学力として全国学力調査や美祢市共通テスト等で現れてきた。

「教えて考えさせる授業」は、認知心理学の理論に基づいて四段階から構成されている。まず、その時間に習得する内容を教師から「説明」する。次に、生徒同士の説明活動や教え合いによって、教えられた学習内容の理解を確認させる（「理解確認」）。そして、教えられたことを活用する課題の協同解決で理解を深めさせ（「理解深化」）、最後に「わかったこと」「わからないこと」を表現し「自己評価」させる。

本校では、この四段階に、予習と復習を授業の一環として組み入れ、これらを通して教師が生徒の理解度をモニターしながら生徒の「困難度」を査定して説明や課題の設定を工夫している。特に「理解深化課題」はその時間に学習したことを活用しながら解決するものなので、この授業形態は、習得を目ざした授業であるとともに活用力を伸ばすことにもつながっている。



2　本校の授業の特長

（１）予習・復習と授業がリンクした学習サイクル

教科書を読んだり簡単な例題を解いたりするだけでなく授業で習得する内容にまで踏み込む予習を通して、生徒が授業の見通しをもち、疑問点を明らかにして授業に臨むことができる。各教科で、単元ごとに予習―授業（四段階）―復習を通して学習を見通せる「単元構想記録」を毎時間作成している。

（２）予習・復習の教師のチェックによる理解度のモニタリング

予習のチェックにより生徒の理解度や困難度を把握して授業に臨むことができる。また、復習課題をチェックすることで学習内容の定着状況を確認できる。

（３）生徒の困難度を予測した説明の焦点化と課題設定

生徒にとって困難であろうことを予測して説明を焦点化する。対話を通して生徒の理解状況を確認しながら説明をする。また、「理解深化」についても、生徒の困難さを予測した上で課題設定や生徒が取り組む上での支援を工夫している。

（４）学習指導要領に基づいたねらいや課題の設定

習得型の授業であるので、何を習得させるのかが重要となる。本校では、学習指導要領の指導事項が習得すべき内容であるととらえて指導案に明示し、授業のねらいとそれを達成するための課題を設定している。

（５）生徒同士の説明による理解確認

「説明できることが理解したということ」のコンセプトのもとに、生徒が理解で

きているかどうかは、お互いに説明をし合うことによって確認している。問題が解けるだけでなく、なぜそうなるのかを説明したり、教師の説明のポイントを自分の言葉で表現したりすることができなければ、ここで再度説明をしている。

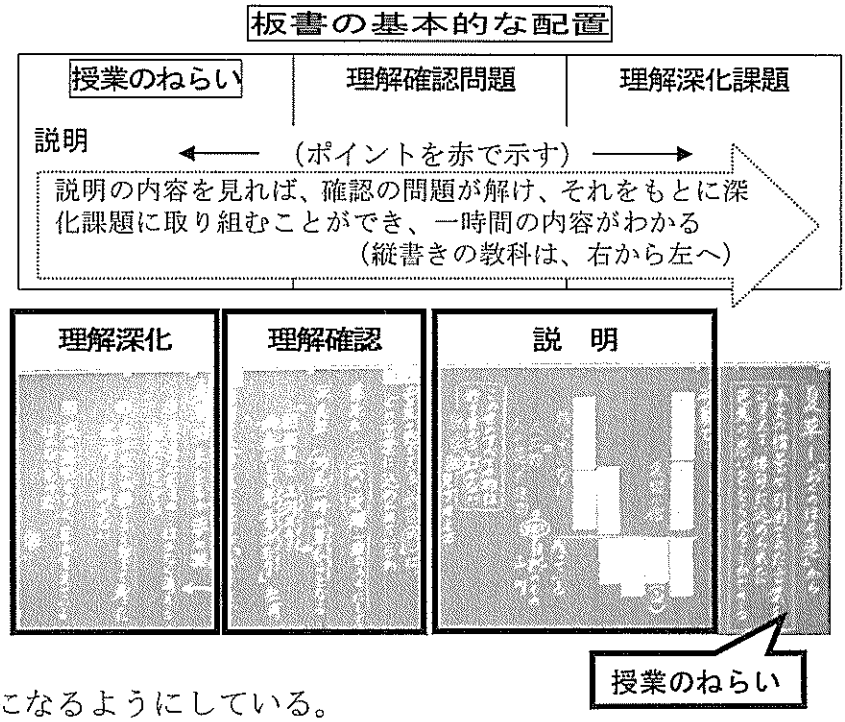
（６）理解深化課題の工夫による毎時間の活用問題

活用力を育てるために、本校では毎時間どの教科も必ず理解深化課題を生徒に解かせている。毎日６時間活用問題を解くことを通して、生徒の活用力を高めている。

また、その課題作成の工夫として、単なるドリル学習や難問奇問ではなく、学習指導要領の指導事項と生徒の「困難度」を意識している。また、解くことによって生徒が「なるほど、そういうことか」と思える課題になるよう工夫している。課題作成の方向性は、生徒が間違えやすい問題、習ったことを応用・発展させる問題、試行錯誤により技能を習得させる問題などで、各教科の特性によって設定している。

（７）「すべての子供を学びのステージに」あげるための、授業の流れがわかり手がかりを示す板書の構造化

黒板の左上にその時間のねらいを明示し、その下に説明のポイントを書く。中央に理解確認問題、右側に理解深化課題が来るようにし、板書を見れば一時間の学習が見て取れるものにしている。理解深化課題は生徒にとってハードルも高く、あきらめる生徒も出てくる。それを防ぎ挑戦しようという意欲を高めるため、赤字で書かれた板書事項がヒントになるようにしている。



（８）ねらいと結びつく自己評価を目ざした授業づくり

自己評価でねらいを達成した生徒に書いてほしいコメントを想定して、理解深化課題を設定し、理解確認の内容と方法を考える。また、その自己評価につなげるために必要な説明内容を焦点化し、予習課題を設定している。

（９）日常化された授業スタイルで全教科での実施

全教職員が市川伸一先生の著書「『教えて考えさせる授業』を創る」を読み込み、校内授業研究や研修職員会を通して授業のイメージを共有し、日常的に「教えて考えさせる授業」を実施している。板書の構造化や、深化課題のヒントとなる要点を赤で示すなどチョークの使い方なども共通理解事項として改善を重ねてきている。各教科で授業の一環としての予習・復習課題を生徒に与え、同じスタイルの授業を実施しているため、生徒の家庭学習への取組も向上し、授業ではスムーズにペアの説明や班での話し合い活動に取り組めている。

３　授業づくり拠点校研修会（平成２５年１１月１４日）指導案

第３学年　国語科学習指導案

指導者　　教諭　刀禰美智枝
場所　　多目的教室

１　単元名　　いにしえの心と語らう

２　単元の目標　・歴史的背景などに注意して古典を読み、和歌や俳諧を通して昔の人の心情やものの見方考え方を読み取らせる。
・表現の工夫や特徴、リズムに注意しながら読み味わい、古典に親しませる。
・古典の内容をふまえ、引用しながら古典に関する文章を書かせる。

３　指導計画（全１１時間）
第１次　音読を楽しもう　古今和歌集仮名序…１時間
第２次　君待つと　―万葉・古今・新古今　…４時間
第３次　夏草　―「おくのほそ道」から　　…４時間（本時３／４）
第４次　古典の伝統　　…１時間
第５次　お薦めの古典を贈ろう　　…１時間

４　本時の学習指導
（１）本時の目標〔学習指導要領の指導事項との関連〕
本文の情景や引用された言葉をふまえて俳句に込められた芭蕉の『無常感』をとらえることができる。（課題対応能力）
〔「Ｃ　読むこと」（１）ア文脈の中における語句の効果的な使い方など，表現上の工夫に注意して読むこと。・「伝統的な国語の特質に関する事項」（１）ア(ｱ)歴史的背景などに注意して古典を読み，その世界に親しむこと。〕

（２）本時の困難度査定
・なじみの少ない人名や地名、漢語、省略表現が多いため、文の意味をつかみ描写されている風景を思い浮かべることが難しい。
・「無常感」を自分の体験や感覚を通してとらえにくい。

（３）本時の指導構想〔（２）の困難度とその対応・支援に下線〕
【説　　明】…平泉の場面で、芭蕉が見ている風景を説明する。人名や地名が多く出てくるので、あらかじめ予習で口語訳と本文を対照して全体の内容を確認させておく。ワークブックの「平泉復元図」を参考に、文中にある地名の位置関係をおおまかにとらえさせる。「…跡」「金鶏山」「北上川」「衣川」などの言葉から、人の築いたものはなくなり、山河などは残っていることに気付かせたい。既習の古典作品（「平家物語」「徒然草」など）と同様に、『無常観』に注目して作者の思いをとらえることを説明する。
源義経・奥州藤原氏の繁栄については既習事項を振り返り、ワークブックなどの資料をあらかじめ読ませておく。
【理解確認】…芭蕉の感じている『無常』の込められた表現として、藤原氏については、「三代の栄耀一睡のうちにして」、源義経については「功名一時の草むらとなる」に注目させたい。また、『無常感』の手がかりとなる体験について想起させ、深化課題の参考とさせる。
【理解深化】…ここまで読み取ったことを手がかりに、本文の情景や引用された言葉をふまえて、俳句に込められた芭蕉の『無常感』について説明させる。「古今和歌集仮名序」学習の折に着目した「心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり」を思い起こさせ、芭蕉が「夏草」を見て心に抱くどのような思いを表現しようとしたのか―人の営みや栄華のはかなさに対して芭蕉の抱いた『無常感』―を表現させたい。
【自己評価】…芭蕉の旅の目的が現代の観光と異なること、歴史的に知られた地を訪れ人の世のはかなさを改めて実感し『無常』の思いにひたる芭蕉の姿、「春望」の作者杜甫へのあこがれが文章にも反映していることに関する記述があってほしい。

（４）準備物　　予習プリント　ワークシート

（5）本時の学習

段階		学習活動・内容	指導上の留意点
予習		【予習】（家庭学習） ・平泉の場面の口語訳と本文との対応を確認し、おおまかに内容をつかむ。	※口語訳と対応させながらプリントに本文を記入させ、この部分の内容をとらえさせる。 ※本文に引用されている漢詩や故事成語を復習し、本文理解の参考にさせる。
教える	説明（10）	1　本時の学習内容を知る。	○平泉の本文を音読し、故事成語と引用されている漢詩について確認する。
		本文の情景や引用された言葉をふまえて俳句に込められた芭蕉の思いをとらえることができる。（『無常観』に着目する）	
		2　平泉で芭蕉が見た風景を本文にそって確認する。 大門の跡　秀衡が跡　金鶏山 高館　北上川　衣川　和泉が城 泰衡らが旧跡　衣が関 ↓ 『無常観』 ※人の手によるものは残らない（自然は残る）	○「…跡」「高館」「和泉が城」「衣が関」は、かつて存在していたが、今はないものであることを確認する。 ○「金鶏山」「北上川」「衣川」は、今もある（目に見えている）ことを確認する。 ○残っていない館や関所など人の作ったものと、残っている山河などが対比されていることに気付かせる。（金鶏山は、秀衡が築いたと言われているが、芭蕉が訪れた時点では自然の一部になっているととらえさせる） ○古典文学を読む際に『無常観』をふまえて読むことが大切であることを説明する。
考えさせる	理解確認（10）	3　芭蕉が藤原氏と源義経の滅亡について抱いた『無常感』は、それぞれどの表現に表れているか。	○藤原氏については「三代の栄耀一睡のうちにして」、源義経については「功名一時の草むらとなる」という表現をしていることを、二人組で説明させる。 ○『無常観』はものの見方、『無常感』は心に感じていること、という違いを説明する。 ○修学旅行の帰校、於福十三夜の後日、美しい花が散った後（例えば桜）のわびしさなどを思い起こさせる。
	理解深化（25）	4　俳句「夏草や兵どもが夢の跡」に込められた芭蕉の無常感を解説する。	○芭蕉の行動や引用された漢詩をふまえ、ここまで確認した語句を用いて文章にさせる。 ※「心に思ふことを見るもの聞くものにつけて言ひ出せるなり」…「人の栄華や武勲のはかなさ」→「夏草」 ○まず、個人で考えた後、三つの班に分かれて、３～４人で読み合った後に推敲させる。
	自己評価（5）	5　学習の振り返りをする。	○予習からの本時の学習を振り返って記入させる。
		・芭蕉が平泉で歴史を振り返りながら『無常感』に浸っていることがわかった。 ・予習のときは気付かなかった言葉に着目して芭蕉の思いを考えることができた。 ・杜甫の詩の一節を引用していて、芭蕉の「古人」への強いあこがれが感じられた。 ・芭蕉は、このようなことを見たり感じたりするために旅をしていたんだな。	
復習・予習		【復習】 ・ワークブック P. 89～91 【予習】 ・中尊寺の場面の予習プリント	○教科書・プリントを参考にして設問に答えながら学習事項を確認させる。 ○口語訳と対応させながらプリントに本文を記入させ、この部分の内容をとらえさせる。

４　研修の成果と今後の課題

（１）授業づくり拠点校研修会アンケートより

＊ 予習・家庭学習の大切さを改めて感じました。学力定着、活用力の基盤として基礎基本の定着のためには、欠かせないものだと感じました。（宇部・中）

＊ 予習が授業の流れをスムーズにし理解を助けていることがよくわかった。教科書で知識として既に取り上げられているものを後追いするのではなく、更にそこから深化させることの重要性に気づくことができた。（宇部・中）

＊ 家庭学習が定着しないことが課題だと思っておりますが、予習することに重点を置いて家庭学習をさせるとよいのだと、改めて思いました。（山陽小野田・中）

＊ 教え、そして考えさせることの価値を感じることができました。（山陽小野田・中）

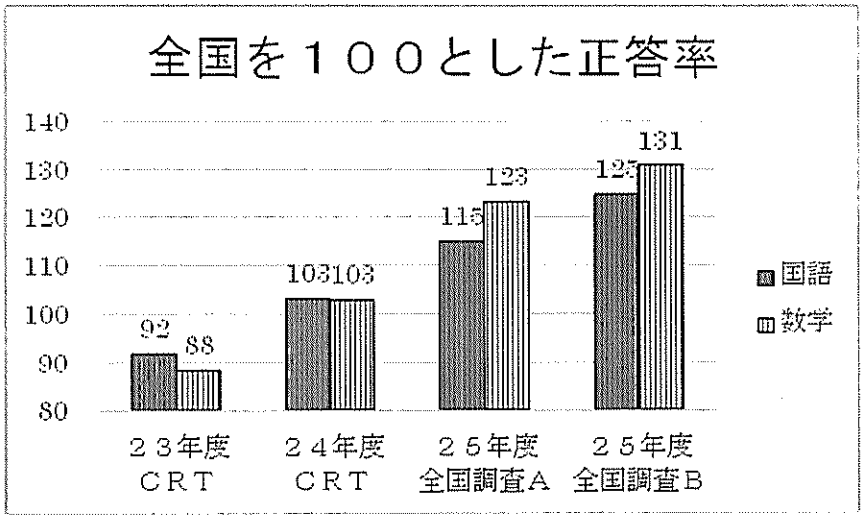
＊ 予習が前半部分よく生かされていました。（美祢・小）

＊ 小学校の授業とずいぶん様子が違い驚きました。「教える」段階では、ほぼ先生一人がお話しされているし、手を挙げて発表するわけでもなく、このまま淡々と進むのかなと思いました。しかし、「深化」段階になると先生の声が止み、じっくりと話し合う活動が仕組まれていて、「この時間のための前半だったのか」と感じました。最後に要点をまとめて押さえられたとき、生徒は授業始めよりも確実に深く理解できたことを実感していたと思います。赤・黄を効果的に使った構造的な板書が思考整理にとても活きていたと思います。（美祢・小）

＊ 気になったことは、授業の中の中学生の発言がほぼ全て「単語」のみであることです。先生の問いに対してただ一言答えることが多く、「文」「文章」を声に出していることがほとんどありませんでした。言葉の力を育てる国語科の授業で、きちんとした話し方を積み重ねることは特に必要ではないでしょうか。（美祢・小）

（２）生徒の成績の変化

①平成２５年度３年生



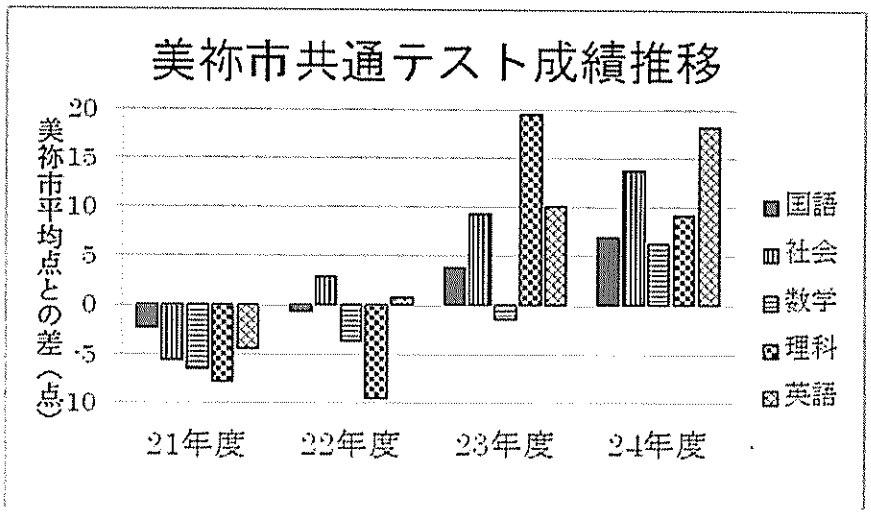
今年度の３年生は、平成２３年度に入学した。入学時のＣＲＴ検査の結果は、４教科とも全国と同じかわずかに下回っている状況であった。

この年から、本校が取り組んでいる「教えて考えさせる授業」が軌道に乗り、全教科での共通し

た実践ができるようになった。２年に進級した翌年は、全ての教科で全国の値を上回る結果となった。

平成２５年度の全国学力学習状況調査の結果は、国語・数学ともに全国平均を上回った。「教えて考えさせる授業」を通して習得すべきことがよく身についていると言える。また、特にＢ問題の正答率が高かったことから、説明活動や理解深化課題に毎時間取り組む中で、生徒の活用の力も伸びていると見ることができるのではないか。

②２年生美祢市共通テスト成績



美祢市では、例年２月に２年生を対象とした五教科の共通テストを実施している。「教えて考えさせる授業」に取り組み始めた２２年度から各教科の成績が向上し、現３年生は２４年度に全教科で市の平均点を上回る成績を挙げることができた。

特定の教科だけでなく、五教科とも成績が伸びているのは、全教職員が「教えて考えさせる授業」という共通の授業理論とスタイルで授業づくりを進めている成果でもある。

（３）今後の課題

「教えて考えさせる授業」に取り組む中で、「説明」の焦点化、予習復習とのリンク、生徒の説明による理解確認など年を追って新たな課題が見つかり、全教職員で解決のための工夫を重ねてきた。「理解深化課題」については、生徒にとってやりがいのあるものにしていくために、日々工夫を重ねている。今後も、教科の本質の面白さが感じられ、生徒が「なるほど」と思える課題を設定していきたい。また、生徒同士の説明活動を取り入れているが、気心の知れた少人数の学級ではきちんとした言語によるコミュニケーションが難しいところもある。活発な言語活動は、本校の課題と言える。

今後も、学力差のある生徒たちがそろって 理解深化課題」に取り組み、全員が達成感を感じることのできる授業をつくり、基礎基本の確かな習得と活用力の向上を学校をあげて目ざしたい。